

ひとりから

真宗大谷派青少幼年センター機関紙『ひとりから』
発行日/2013年10月1日(年4回発行)
発行所/真宗大谷派(東本願寺)青少幼年センター
〒600-8168 京都市下京区室町通六条下る
TEL: 075-354-3440 FAX: 075-351-9599
E-mail: oyc@higashihonganji.or.jp
発行人/青少幼年センター長 木越 渉



子どもたちは木登りが、大好き

小さな求道者とともに歩む

青少幼年スタッフ 酒井義一

小さな求道者とともに歩む。まだ二〇代だった頃、大谷派の児童教化の研修会に参加した。その時のテーマがこの言葉だった。以来、三〇年たった今でも、忘れられない言葉となった。

「ここでいう「小さな」とは、言ってみてもなく、「体の小さな」という意味である。子どもが求道者。そんなこと、考えたこともなかった。

仏さまの目から見れば、子どももひとりの求道者。生きる道が見いだせず、それゆえ懸命に道を求めつづけている存在なのだ。そのような求道者として、ひとりの子どもを見いだし、ともに歩んでいくこと。それが大谷派の児童教化のいのちなのだ。

お寺にひとつ子どもたち。目の前にいるこの子どもたち一人ひとりが、道を求めて今を生きている求道者。そのことを心の底から実感できる、そんなひとりの人間でありたい。

蓮ちゃん通信 その① 巻頭写真募集中!

青少幼年センターでは、機関紙「ひとりから」の巻頭を飾って頂く「お寺にどう子どもたち」の写真を募集します。今回は冬の行事を中心に募集します。皆さんのお寺での子どもたちの笑顔をお寄せ下さい。

宛先は、郵送または
E-mail:
oyc@higashihonganji.or.jp
「ひとりから」巻頭写真募集係」まで



合掌ナーム

東京教区

星野 暁

さあ、これからみなさんと飛行機に乗って海外旅行をしたいと思えます。行き先は、世界一高い山、エベレストがそびえ、お釈迦さまが生まれた国、ネパールです。

ネパール行きの飛行機に乗り込むと、機内にはカレーのにおいが充満しています。その中でサリーという民族衣装を着た客室乗務員が合掌をして「ナマステー」と出迎えてくれています。ネパールなどの国では仏さまへのあいさつだけでなく、誰に対しても合掌して「ナマステー」とあいさつします。

さて、飛行機に乗って約十五時間。窓の外にはヒマラヤ山脈が見えてきました。もつとすぐ到着です。飛行機は無事、滑走路に着陸しました。やっとネパールです。お腹が空いたので、さっそく空港を出て、ネパール料理のレストランへ行ってみましょう。

ネパールでは毎食のようにご飯とカレーを食べます。食事をしている人を見るとスプーンやお箸は使っていない。どうやって食べているのか見ると、右手だけでご飯とカレー、それから豆のスープを混ぜ、おいしそうに食べています。人びとの右手をよく見ると、

カレーの色に染まっています。カレーの香りもしみこんでいるようです。

おいしいカレーでお腹がいっぱいになりました。するとお腹がムズムズ。そう、トイレに行きたくなりました。お店の人にトイレの場所を聞き、行ってみます。便器は和式に似ています。しかし大変です。日本のトイレには必ずあるはずのトイレットペーパーがありません。いそいそでお店の人に「トイレットペーパーの使い方を教えてくださいました。」

便器の左側にはバケツと空き缶があり、蛇口からは水がポタポタとバケツに落ちていて、きれいな水がたまっています。その水を左手で空き缶にくみ、おしりの後ろから流し、左手でおしりを洗います。残った水で左手を洗って、その水をトイレに流し、終了。ですから左手の色や香りは…、云々しない方がいいですね。

このように、ネパールなどの人びとは、食事の時に左手は絶対に使いません。そして、食事やトイレに限らず、右の手はよい手、左は悪い手と考え、日常生活の色々な場面ですべての右手を使っています。

子どもたちと聞く法話



このことを聞いて、飛行機の客室乗務員が合掌しながら「ナマステー」とあいさつしてくれた姿を思い出しました。みなさんも合掌してみてください。合掌とは左右の手をひとつに重ね合わせます。つまり、きれいな手と汚い手を、ひとつに重ね合わせているのが合掌です。ちょっと考えてみてください。あれほどキッチリ使い分けている左右の手を、なぜ、合掌はひとつにくっつけてしまうのでしょうか？

そこで思いました。合掌とは、シワとシワを合わせて…、なんてことでなく、自分が思い込んでいる、きれいな汚い、良い・悪い、好き・嫌いなど二つに分けているものを、ひとつに重ね合わせている姿。つまり、あいさつの合掌は、「私はあなたを、好き・嫌い、良い・悪いなどと、わけへだてて見ていませんよ」と表現している姿のようです。また、あいさつの言葉の「ナマステー」の「ナマス」とは南無阿彌陀仏の南無のことで、敬いのこころを意味し、また、「テ」は「あなた」を意味する言葉なのでです。

このように、作り物でなく、本当に相手を敬うこころ、大切に思っているこころは、きれいな汚い、良い・悪い、好き・嫌い二つに分けているこころか

らは生まれないことが、ネパールのあいさつから見えてきませんか？

良い・悪い、好き・嫌い、二つに分けて見たり考えている私たち。その比べてしまうこころと、まなこが、本来の「尊さ」や「大切さ」を見えなくさせているのです。そして、さらに友だちや自分のことも見下し、傷つけてしまうことを、合掌は、教えているのではないのでしょうか。

さあ、みなさん。阿彌陀さまに手を合わせ、いっしょにお念仏を称えましょう。

蓮ちゃん通信 その②

2013年11月23日(土・祝日) 子ども報恩講のつどい
「はじめての報恩講—東本願寺で子ども会—」開催!

青少年が親鸞聖人や真宗本願にふれるご縁となることを願うとともに、家族そろって報恩講にお参りいただく機縁として開催します。御影堂で子どもたちの調声のもとお勤めをし、お勤め後は同朋会館講堂でおはなしを聞き、レクリエーションなどを行います。是非ご家族そろって報恩講にお参りくださいますよう、ご門徒各位にご奨励ください。

- 定員 / 200名(小学生、園児 ※保護者・引率者含む) ●参加費 / 無料
- 申込締切 / 2013年11月15日(金) ※ただし、定員になり次第締め切らせていただきます。
- 申込方法 / 青少年センターまで直接お申込ください。

※詳しくは、『真宗』9月号・10月号をご覧ください。





「いただきます」ってなあに？ —子ども報恩講のお齋—

ひとりからはじめる
イベントレシピ

報恩講においては、お齋の時間も大切にされてきました。子どもたちと共にお齋をいただき、「いのち」について考えてみましょう。さあ、「食前・食後のことば」を子どもたちと唱和して、美味しいお齋をいただきましょう！



子どもたちと箸袋を作しましょう

「手作り箸袋」

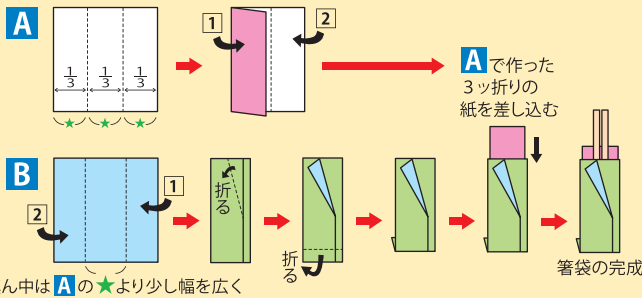
様々な色や柄の
折り紙の組み合わせを
楽しみましょう！

用意するもの *

折り紙2枚 (うち1枚は両面色つきのものだとベスト！)

作り方 *

- 1枚目の折り紙を縦に3等分に折る **A**
- 2枚目の折り紙 (両面色つきの折り紙だとなおよい) を
①で折ったものが入るように真ん中を太めにして3つに折る **B**
- ②の表面は右側に少し余白ができる
- ②の上の部分を三角形に折り、さらに下の部分を折る
- ④に①を差し込んだら完成

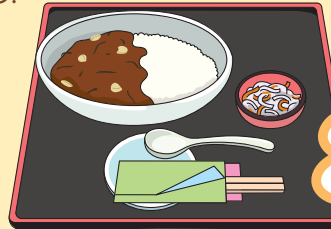


真ん中は **A** の★より少し幅を広く

箸袋の完成

注意! 子ども会や子ども報恩講で食事をする時は、
事前にアレルギーのチェックを行いましょ！

～さあ、みんなで一緒に「いのち」をいただきましょ～



精進カレーと紅白なます

子ども報恩講には、
子どもたちも大好きな
精進カレーが
おすすめです。

「食前・食後のことば」を書いてみよう

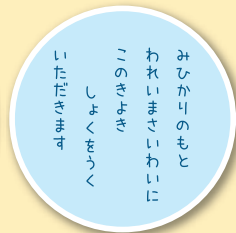
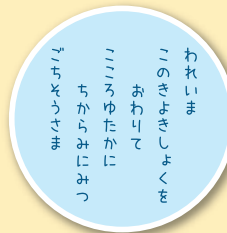
厚紙に「食前・食後のことば」を書いてことばに親しんでもらいましょ。厚紙は箸置にもなります。

「箸置」

用意するもの 厚紙・ペンやマジックなど *

作り方 *

- ① 厚紙の両面にペンやマジックで
「食前・食後のことば」をそれぞれ書く



青少年センターのホームページ内「楽しくあそぶ」のコーナーでは、様々なあそびを紹介しております。是非ご活用ください。



この機関紙『ひとりから』は、青少年教化に携わる方々を読者対象としているのに対し、子どもたちを直接の読者対象として発行されている新聞があります。年間四回発行され、この秋七十号を迎えリニューアルされた『ごぼうこども新聞』(名古屋別院発行)です。
 仏典童話作家の渡辺愛子さんによる仏典童話、働く人たちへのインタビューコーナーなど子どもたちにダイレクトに届く内容が満載です。また、子どもたちからイラストや悩みごとを募集し、紙面で紹介し共に考えようといった、子どもたちとの双方向的な関係が紙面をとおして作られています。

特集

ごぼう
こども新聞
(名古屋別院発行)
リニューアル!!

送料のみで必要部数を発送しておりますので、詳しくは名古屋別院教化事業部までお問合せください。
電話：052-331-9578 FAX：052-331-9579



青少年センターでは、青少年教化に役立つ情報を発信していきます。皆さんの教区・組・寺院での青少年教化に関する情報をぜひ青少年センターまでお寄せ下さい。

マサコのちょこっとインタビュー



マサコ

機関紙『ひとりから』の編集長をつとめる。青少幼年スタッフでもある。



さがえ なつ ふうみ
佐賀枝 夏文

1948年生まれ。大谷大学修士課程修了。児童福祉施設等での児童指導員、心理判定員を経て、現在は大谷大学文学部教授で大谷幼稚園長を兼務。青少幼年センターの研究員でもある。カウンセラーネーム「サガエさん」です。

今回は、大谷幼稚園長で青少幼年センターの研究員でもある自称「サガエさん」に、「子ども会」をはじめの時の不安や緊張についてインタビューをしました。

はじめてみませんか…

マサコ 「ひとりからはじめる」とありますが「子ども会」をはじめると、やはり不安や緊張が付きまとうと思います。サガエさん、どうしたらよいでしょうか？

サガエさん ご自坊で「子ども会」をはじめたいとお考えでしたら…、ご自分のなかにある不安感をもちながら、はじめてはいかがですか。

マサコ サガエさんは同朋ジュニア大会の前日、スタッフのみんなに向かっていつも尋ねられますよね。「同朋ジュニア大会を明日に控えて、今、どんなお気持ちですか？」と…

サガエさん 「いつでも大丈夫です！」という人もいれば、気持ちがだんだん重くなる方だっていらっしゃいます。その気持ちを消すことはないとおもうのです。そのままでもいいとおもうのです。ご自分のお気持ち



【同朋ジュニア大会】
毎年8月1日～4日、同朋会館で
小学5年生～中学3年生を対象に開催されている。

と付き合いながらやればいいのですよ。

マサコ 「子ども会」を開くとすると、「ある程度子どもが集まって、にぎやかでないといけなのでは？」と考えますが…。

サガエさん 「子ども会」をはじめると、見られていないのによその目が気になるものです。また、「子ども会」はいつでも楽しい場でなければ、と余分なこともよぎるかもしれません。

でも、心配はさておいて、ぼくはおもうのです。いま子どもたちは、学校でも近所でもお休み処や逃げ場がなく、窮屈な感じがします。だから、お寺に集う「場」が開かれることって大事なんだとおもうのです。「子ども会」は、まずは、「場」を提供することからはじめてはいかがでしょう。お寺の「子ども会」にいる「おとな」は、先生でも親でもないのがいいとおもうのです。そこは、学校ではありませんし、別の「場」の友だち、おとな、自分自身と出遇うのだとおもうのです。そして、なにか「ドラマ」がはじまればいいとおもうのです。

マサコ サガエさんがいわれるように、いざ「子ども会」をはじめたとして、やはり内容を考えるのも大変とを感じる方が多いのではないのでしょうか。

サガエさん そうですね、はじめとなると「子ども会」の内容や遊びについて、ご

心配になるとおもいます。しかし、まずは、内容や遊びの前に、「枠」が大事です。時間のはじまり、おわりですね。「枠」があれば、そのなかで、子どもたちが「あんしん」できますし、おとなは見守ることが出来ます。はじめとおわりには「仏さまに手を合わせる」、そのなかでの「遊びや楽しい体験」を入れるといいとおもうのです。まずは、主催される方の無理のない時間と「場」を提供すればいいとおもうのです。

遊びは、主催される方が「やってみたかったこと」があれば、そのことを入口にして無理なくスタートされたらいいとおもいます。

マサコ 子どもたちはそれぞれ何かを楽しみにしながら、子ども会に来てくれているのだということ、私自身も最近、ある男の子に教えてもらいました。どんな子ども、ともに仏さまに手を合わせられる「場」として、まずは「子ども会」を開いてみる。そして、そこで迷い、戸惑いながらも、一緒にいろいろなことを感じられたらいいなと思います。

「サガエさん」ありがとうございました。

青少幼年センターでは、メール相談窓口を開設しております！

子どもたちの悩みごとにサガエさんがお返事します。

sagaesan@higashihonganji.or.jp

(上記のアドレスから返信しますので、受信拒否設定にご注意ください)

蓮ちゃん通信 その③

御正忌報恩講期間中は、「子ども参拝案内所(子どもテント)」を開設します。

11月21日～28日は、東本願寺境内白洲にて「子ども参拝案内所(子どもテント)」を開設します。是非ご家族で御正忌報恩講にお参りいただき、テントにお立ち寄り下さい。お子さまに楽しんでいただける場をご用意しております。



◎報恩講の季節の第二号はいかがでしたでしょうか？「子ども報恩講」が勧められ、あるいは家族で報恩講にお参りする姿が各地で見られたらいいですね。次号は冬の子ども会をテーマに十二月一日発行予定です。皆様からのご意見・ご感想をお寄せ頂ければ幸いです。一世を超えてつなぐいのちの報恩講―(青セ主幹)

◎報恩講の季節となりました。私の子ども頃の報恩講の記憶は、鮮やかなお華束の色や、お斎の匂いです。子どもたちと一緒に報恩講の大事さを、五感で感じられる場としてぜひ、「子ども報恩講」を開催していただければと思います。(編集長)

編集後記

